「できるだけ長く空を飛びつづけること」

捜査、救助の使命感

「高校の頃は、進路指導で先生を困らせました。これまで扱ったことのないケースでしたからね」と、佐々木さんは懐かしそうだ。「今のように情報が多い時代ならまだしも、当時パイロットになるための方法なんて、先生にも見当がつかなかったんじゃないかな」。

高校卒業後、夢を実現するには数々の難関を超える必要があった。百倍を越える競争率を突破し、海上保安庁の試験に合格。海上自衛隊に委託生として入隊後、航空力学をはじめ経済学や英語など、数多くの学科や飛行機操縦の基礎訓練などが待っていた。知力と体力を鍛え抜く毎日。「地獄を見た気がしました」という言葉にも実感がこもる。それぞれの学習段階で行われる試験で一回でも不合格になれば、パイロットへの夢は即座に絶たれるという厳しい環境だった。

昭和五八年、研修を無事修了し、大阪八尾市で初めてヘリコプターを操縦することになった。「それまで地上訓練ばかり。免許を取ってすぐに操縦できるというものでもないんです」。仕事の第一線に身を置きながら、合間をみては訓練を重ね、一年後には防災ヘリコプターが操縦できる両機種機長資格を取得。羽田空港への転属も決まった。八尾市からの転属は初めてという快挙。これまで謙虚さを保っていた佐々木さんに、誇らしげな表情が浮かぶのも無理はない。「当時、羽田でもっとも若い機長でした」。

海の治安を維持する海上保安庁のパイロットとして、日本全国を文字通り飛び回った。仕事の面白さに満足していた頃、やってきた突然の契機。警視庁が全県に航空隊設置を義務付けたことから、岩手県警は県出身パイロットの佐々木さんを抜擢した。地元へ戻るか、ここに残るか。「両親が弱ってきたと感じた矢先だったし、この仕事を続けられるに越したことはなかった」と、地元に戻ることを決意。幼い頃、鳥のように空を飛びたいと願い、粘り強い努力の末に実現したパイロットの仕事を地元で続けるチャンスの到来でもあった。

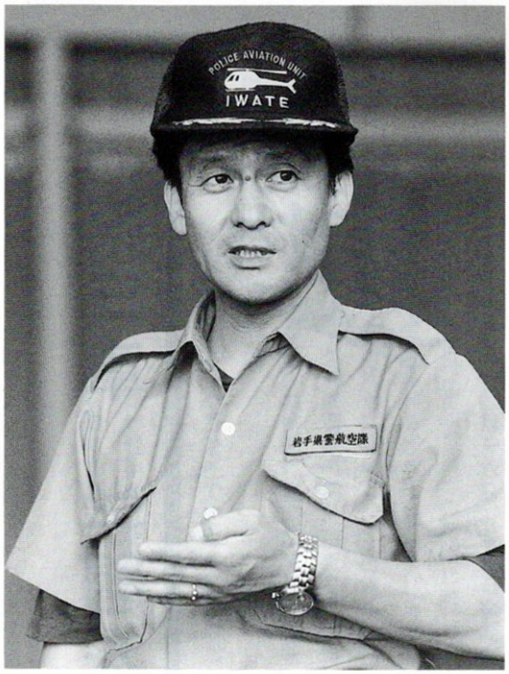
現在、佐々木さんは警察機関としての業務全般はもちろん、空からのパトロール、捜査や救助、事故現場の写真撮影などを行ってい

佐々木　高

ささき　たかし

新25回生

昭和48年、岩手高校卒。昭和52年、海上保安庁へ入庁。大阪勤務などを経て東京国際（羽田）空港へ転属。昭和60年、岩手県警へ。41歳。岩手県警察本部　生活安全部　地域課　岩手県警察航空隊　航空係長。岩手県警部補。



愛用機『いわて』説明にも熱がこもる

る。「今、操縦しているヘリコプターは、クルマでいえば軽自動車みたいなもの。トラックみたいな仕事を期待されるのは、厳しいなぁ」と愛用機『いわて』を愛しそうに眺める。山々に囲まれた岩手県で、仕事が忙しくなるのは山菜取りが盛んな時期。川で溺れた子供の救出や、三日がかりで60代の女性を山から救出したことは、今でも印象深い思い出だ。

「自分のことは、いつも後回しにして考える性格」という佐々木さんにも、優先したいことがひとつだけある。

「できるだけ長く空を飛び続けること」。自らの言葉を確認するようにうなずいた時、それまでの穏やかさは消えた。パイロットとしての使命感が胸に込み上げてきたのかもしれない。

（吉田　聖子）

愛用機『いわて』